

隠岐島の須恵器について

山 本 清

一、は し が き

ここに隠岐島の須恵器をとりあげたのは、それによつて隠岐島の古墳の年代を考へる上に若干の拠り所も得られようと思ふためである。隠岐については私自身の昭和二十四年から二十六年までの調査と二十九年から三十二年まで毎夏行つた関西大学と島根大学の共同調査とで実査した須恵器は相当多数にわたるのであるが、隠岐の須恵器も今ここに主にとりあげるふたつきにも見られるように、一つの器種のものについて見ても相当のバリエイテイがあつて、それがかなり長い年代経過に應ずるものであることが知られる。それで主にその古式のものについて考へ、また山陰本土の須恵器の変遷も考慮に入れて隠岐島の須恵器を考へ、なお隠岐島の古墳の時期についても論及したいと思ふ。

二、隠岐出土の古式須恵器

筆者は年来地域社会の發展を考へるよすがとして地域社会における古墳文化の推移をたしかめる目的のために、後

期古墳に最も普遍的な遺物である須恵器について、差しあたり山陰地方の編年体系を組みたてたいと思つて注意して來ているのであるが、さきに松江市の葉師山古墳遺物に関する小論の中で出雲地方須恵器の編年観の一端を發表したことがあり、その際種々の理由から試みにふたつき形式の変遷にふれ、それが古墳時代須恵器の編年を考へる上の一つの便利な目安となることを述べたことがある。然るに隠岐島の須恵器を調査して、たまたま他種のものとは確かなものがあまり見当らずふたつき数個に古式のもの認められたので、主にそれらふたつきについて記し、尚若干の他種遺品をも挙げることにし、まず個々の品について説明することとする。

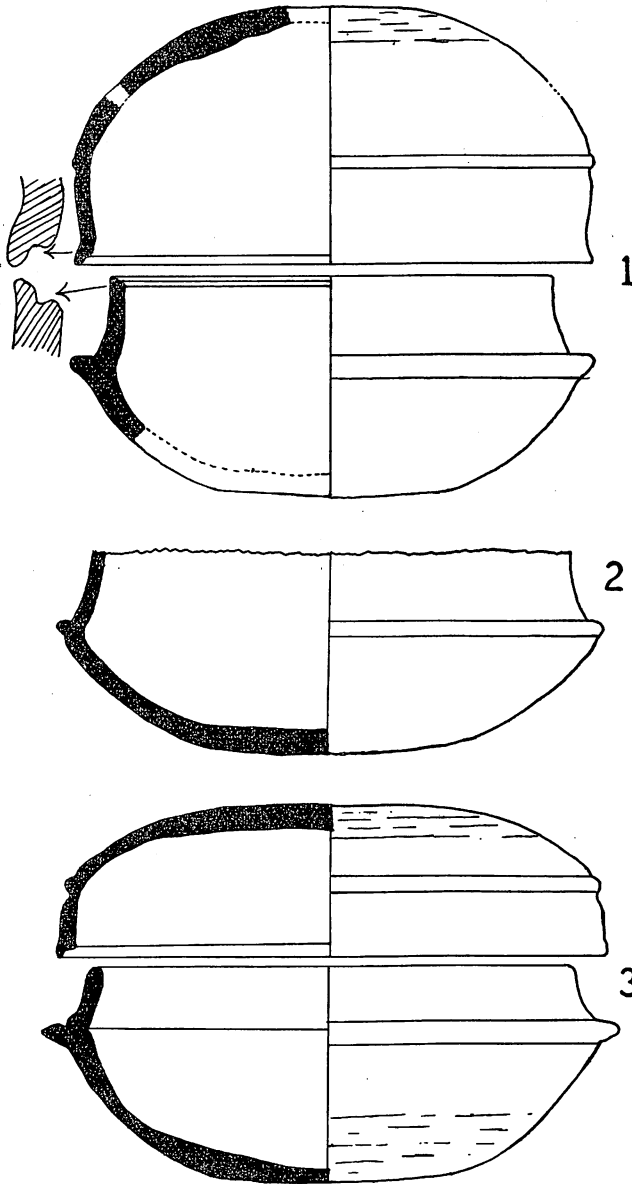
- (1) 西郷町大字加茂、船島第六号点古墳出土ふたつき
(第一圖一)

この古墳は海岸に臨む丘陵支脈の尾根筋に十数基ある小形古墳群中の一つであつて、墳丘は径約九米、高さ約一・五米の簡単な円墳で埴輪葺石はなく、その中央上部に比較的偏平な海岸の石を以て構築した箱式棺様の主体構造をも

つ。棺は長さ約一・六米強、幅約三五糎、深さ三〇―二五糎の空間をもち底は小礫を敷くもので、その主軸はその頭部を容れたと思われる方を東北方（磁針と約四〇度）に向いている。遺物は刀子様利器、小形刀等の残片少量と、ここにとりあげる須恵器片と土師の微細片とである。土師器は

小片のため形式不明である。さて須恵器片の方は、小片をも合せて一四片であるが、ふたつき一個体又は二個体に属するものと思われる。若干の欠失部があつて完全には復原出来ないが、図示した程度にはわかるので、その形式を知るには左程困難ではない。

第一図 隱岐出土古式蓋坏（1 西郷町船島、2 五箇村中学校、3 五箇村重栖運三郎宅裏）縮図 1/2



よつてその特徴を観察すると、胎土はかなり良質で焼成も普通、淡い青灰色のものと淡い白灰色のものがある。ふたの方は側壁は垂直に近く且つ古式に特有な美しいカーブをもち、高さも高くて六七耗あり、側壁と上面との境にはやや低いけれどもはつきりした凸帯があり、上面は丸みを帯びてこんもりともれ上つていて、頂上部の比較的小範圍が陶車上で削り放されている。口唇の作り方も古式のものに通有な、はつきりした二段式である。次に身の方を見ると、ふたの内側にはまる部分は垂直に近く、且つ頗る高くのびて、二二耗の高さをもっている。その口唇の作り方もふたと同様に二段式である。ふた受の凸帯はやや太い感があるけれども、その上面は水平であつて、ありふれた品のように尖端が外側の上の方へのびる式のものとは全く異つている。身の底部は欠けているけれども側面のカーブから大体図に示す形を推測出来る。ふた身ともに全体としてこんもりとした美しい形をしており、丁寧な作られていることが注意される。このように①特にふたにこんもりした深みのある美しい形、丁寧な作り、②特にふたの側壁が垂直で高さの高いこと、③またそれに応じて身の方の、ふたをうけてその中にはまる部分が垂直に近くて高いこと、④ふたの側壁と上面との境には明確な凸帯のあること、⑤ふたも身も口唇が二段式（或はのみ刃形の断面）の特殊な作りになっていること等は初期のふたつきに見られる特徴と考えられるが、船島六号点古墳のふたつきはあらゆる点においてこれらの特徴を兼備していると云つてよい。なおこうした古

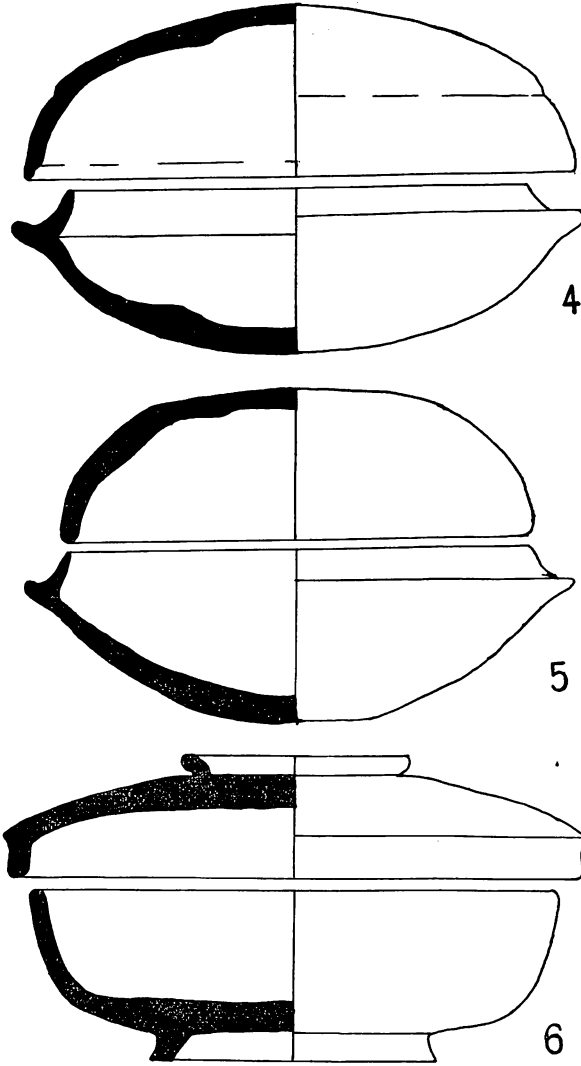
式の特徴は最も数多く目にふれる第二図の4や5の品と比較すれば一見して明かである。

以上でこのふたつきが古式の典型的なものであることは明かであるが、これを船島六号墳の副葬品として取扱う事については尚若干の問題がある。それは、この品は明かに右古墳の主体たる箱式棺内部から筆者等自身が検出したのであるけれども、棺中において既に小片に砕かれていたのみでなく、個体として復原するに困難を覚える程欠失部が多く而も散乱状態で発見されたのである。そもそもこの石棺は封土表面に石材が散乱していて、あたかも既掘の様相を示すようであつたが、発掘調査の結果、そのふた石までは後世の手が加つた形跡のないことは大体確実と認められたのであるから、その中に副葬品として当初から砕かれた品の一部分のみが置かれたことは通常の例から推して如何かと思われるからである。箱式棺には通例は一回の埋葬、即ち一人の遺体をおさめたと考えられるけれども、二体が検出された例も諸所において時に認められることであるから、船島のこの場合も仮に二回の埋葬が行われたとして、第一回に副葬された品が第二回の埋葬の時、砕かれてその一部破片が棺内に遺存したと考へても差支はなく、筆者はやはり本来の副葬品と考へる。別な考として住居址關係の遺品がたまたま棺内に混入したという推測もあり得るが、この古墳の立地を見ても住居には不適當であり、またこのような古式須恵器の時期には、山陰本土の当代の須恵器の一般的な様相から考へても、それがとうていこのような僻地

の人の日常生活用品とはなつていなかつたと思われるのであつて、何れにせよ住居址関係の混入とは解し難い。かくて、このふたつきを副葬品と考えたと、ここに船島古墳群の年代に一つの手がかりが得られることにもなると思う。

(2) 五箇村大字郡、中学校敷地出土ふたつき(第一図2)
出土場所はこの村で最も広い水田地帯となつている沖積

第二図 隠岐出土ありふれた蓋杯 (4 西郷町東郷小田、5 西郷町飯田白崎、6 海士村御波横穴) 縮図 1/2



平地に臨む、低い丘陵の麓に近い緩傾斜地を占めている。出土した時期は昭和二十三年か二十四年と推測される。工事で掘り出されたものが一括されていたので、その出土状態、他品との共存関係等は不明である。ただ同時採集された品は、土師器(つば・たかつき等の残片、まり等)の外に軟い石で作つた一種の石製模造品とも見られる長さ一二・五

糧、幅六糧、厚さ一・七糧の短冊形に近い扁平な斧形品一個が含まれていた。さて件のふたつきは身だけであるが、底部も丸みを帯びた比較的丁寧な作りのもので、ことにふた受のところは、ふたの中へはまる部分が船島出土品同様に垂直に近く、特に高いのが注意され、口唇部は惜しくも欠けていて、その形式は不明である。残存部だけでも、一九糧の高さをもつている。

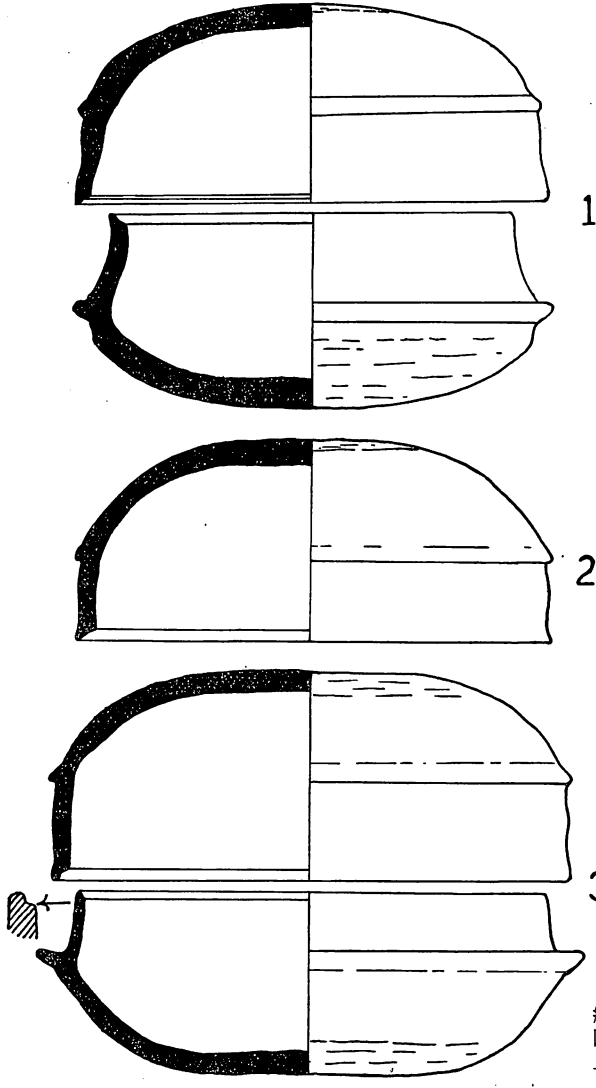
ふたをのせる凸帯部は幅僅かに四糸で断面は凸面の丸みをもつ点も、ありふれた後のものとは対照的である。要するにこの品も先に挙げたような古式ふたつきのもつ諸種の特徴をことごとくそなえている。

(3) 五箇村大字苗代田垣ノ内、重栖運三郎宅裏出土

ふたつき(第一図3)

第三図 山陰本土古式蓋杯 (1 出雲松江市西川津薬師山、2 石見浜田市周布日脚、3 伯耆西伯郡大和村百塚原)

出土場所は低い丘陵の支脈が沖積平地に突出するその尖端部の比高四一五米の所で、その上手の尾根筋には小さい円墳等数基点在し、丘陵の麓には横穴が点在し、この附近一帯が一つの小形古墳の群集地域である。宅地の拡張工事の土取りで遺物を発見した由で、昭和二十九年八月十三日現地を踏査したところ、土を取り去つたあとの



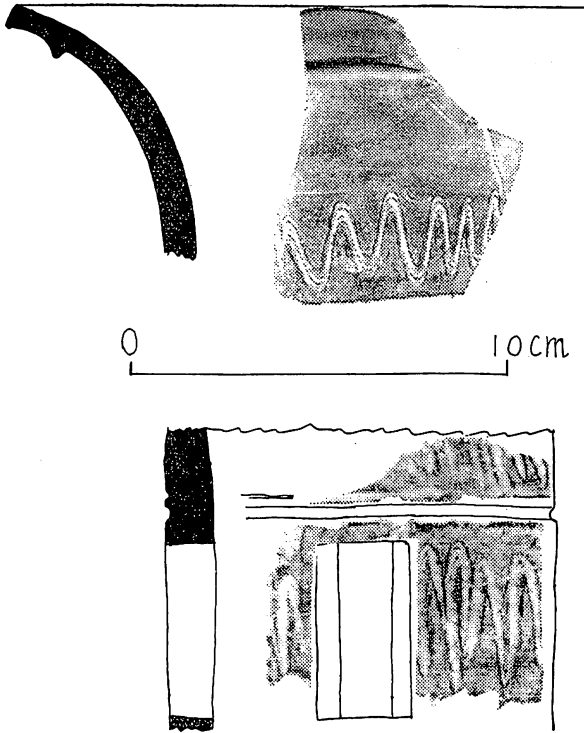
崖(高さ三・五米)の上部は地表から一・五米下まで黒色の土層があつて、地表下一米位の所に土師器の小片の点在を認めた。ここに記すふたつきも同様の地層から発見の由で、土師器の小形の鉢やかつき残片なども採集されていた。

ふたつきはふた二個、身一個あつて、いずれも欠損部が

縮図 1/2

あるが同一形式のものである。色は白味がかつていて、所々赤褐色の所もあるが、二次的に火にかかったことも考えられる。ふた身ともに全体として先に挙げた古式の特徴をかなりよくそなえているが、ただ先に記した二例に比し、ふたが浅く、その側壁の高さがかなり低くなっていることと、身のふた受のふたの内側にはまる部分がやや強く内方

第四図 隠岐出土古式須恵器(上、五箇村川向、下、西郷町西郷小学校)



へ傾く点、及びその口唇が須恵器普及期以後のありふれた品のように単純な作りになつている点などは、それだけありふれた後代の品に近いものと云える。このように全体として尚多分に古式の姿を保ちながらもありふれた品に近い要素をもそなえているので、かつて筆者は出雲を中心としたふたつきを試に六形式(段階)に分つた際、その第二段目に置いて見たことがある。そうしてそれは石見浜田市めんぐる古墳のもの(第五図)と大体同じ段階として取扱つてよいと思うのである。

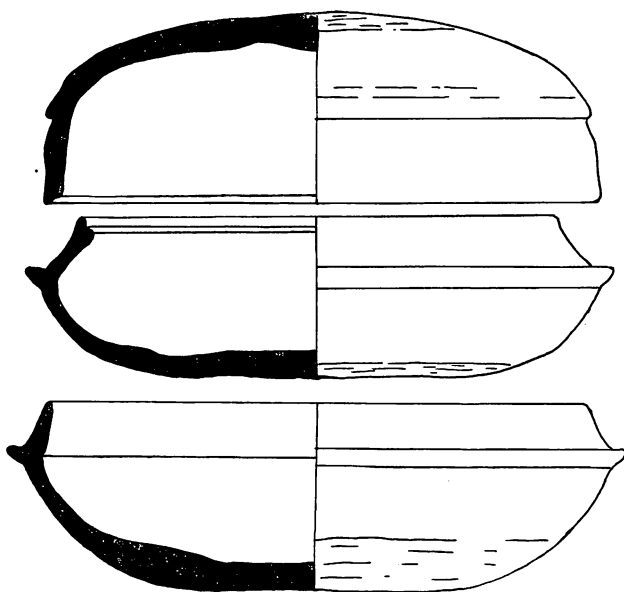
(4) 五箇村大字北方字川向丘陵上円墳出土品

(第四図の上)

これは昭和三十二年七月、同所の下手の横穴を清掃調査のついでに、踏査して採取したものである。古墳は比高四〇米ばかりの丘陵上の相当広濶な平坦面にあり、小古墳数基並存する中の主なものであるが、径一〇米ばかり、高さ一・五米ばかりの小墳である。近時山林伐採後発掘されたようであつて、内部構造は主にやや扁平な径三〇―四〇位の石を用いた構造のものであつたようである。ここにとりあげた須恵器片は、掘り散らされた封土の中にころがつているのを採取したので、それが棺内に副葬された品か否か不明である。

右の須恵器片は図に示すように、口径三〇位のつばの口、または大形脚付つばの脚かと思われるが、内面にも広く釉薬が見られるので、一

第五圖 石見浜田市めんぐろ古墳出土品 縮図 1/2



応つばの口と考える。藁のない部分は淡い灰色で、そのはだの感と云い、大ききの割に薄くきやしやな感じと云い、また美しいカーブを以て大きく口の開く点と云い、更にまた波状文の山と山の間が狭く、山と谷との上下の振幅の大きく、櫛の目が繊細で美しいことなど、何れも古式の品に多く見かける特色を多くそなえておるように見受けられる

ので、一片の零細な資料ながらここにとりあげた。

(5) 西郷町西郷小学校校庭出土品(第四図下)

西郷小学校はかなり高い台地の上にあつて、その校庭の工事の際に出た多量の土師器片、須恵器片等が一括保存されているのを昭和二十四年一月に調査してこの破片に注意し、三〇年八月再調査した。右の小学校附近には数個の古墳のあつたことが知られており、それらの内部構造や出土品も或程度分明しているものもあるが、この須恵器片の出土状況等は全く不明となつてゐる。併し諸種の事情から一応恐らく古墳出土品であらうと推測する。

件の須恵器片は図に示すように、径約一〇糎の円筒形のもので、上部には一条の沈線が見られ、その下は一種の波状文を施し、その波状文帯に幅二・五糎、高さ四・五糎の矩形の透しを設けたものである。これは一種の器台の一部と解される。即ちやや大きな截頭円錐形の上に細長い円筒状の棹を作り、その上に鉢形の受け皿をつけた式のものその棹の部分であらう。この種の器台はその例が多くないようであつて、筆者は寡聞にして松江市金崎古墳の外は山陰の出土例を知らない。金崎出土品にしろ、対馬出土品や佐藤虎男氏著古字一八五頁所載の徴古館藏品というものにしろ、何れも極めて近似したもののようであつて、古い須恵器の特色をよくそなえているようである。群馬県前二子塚出土の四神つきの品も若干便化しているかもしれないが大体これに近いように見える。これらから推すとこの式の器台は早い時期に多く行われたとも考えられ、また西郷

小学校の品の楕形の波状文の手法やその焼成の色合など金崎古墳出土品に酷似しているようにも思うので、一応この品も古式の須恵器として注意しておく次第である。

三、須恵器から見た隱岐古墳の内部構造

右に挙げた隱岐の須恵器は隱岐での古式須恵器というだけでなく、特に(1)の船島出土品、(2)の五箇中学出土品は確かな山陰本土初期の須恵器と異なるものでなく、また日本初期の須恵器というも差支ないと思う。このような須恵器の頃には未だ地方には窯がなかつたと思われる。それはこの式のものでは地方では住居址はもとより古墳でも甚だ出土例の稀なことでは知られる。したがつてこの式の品は畿内その他の特殊な文化の中心地帯から供給されたものと考えざるを得ない。日本国内の諸地方、ことに互に遠隔地のものにも余り地方色がなく、ほぼ同様の形質をそなえているようであつて、弥生式土器や土師器の地方差の甚しいのと極めて対照的であるのは、須恵器が新しく輸入された技術に基くものであり、その初期には右の事情にあつたためと考えられる。(これが普及期に入ると相当顕著な地方色を生じること)に注意されているのは筆者ばかりではあるまいと思う)

さてこのような古式の須恵器を出した古墳で、後期古墳に特有な家形石棺や横穴式石室を主体とする例は稀なようであつて、肥後の江田船山古墳の如きはその稀な例の一つであろう。船山の出土品は昭和二十三年の奈良の日本考古展でふたつきの外貌を見たにすぎず、その詳細は知らないが、外から見たところ、ふたの側壁がやや傾斜して口が開

く傾向が認められるようであるが、側壁と上面との界線が明確で、そこにしつかりとした凸帯があり、全体の形相と相まつて古式のものと考えられた。

次に(3)の五箇村重栖運三郎宅裏出土品は種々の点で浜田市めんぐろ古墳出土品と近いものであること先に述べたが、この古墳から出た数種の遺物と同類の遺物を出した中国地方の古墳乃至若干の九州、畿内等の古墳を比較して見るとその須恵器も大体相似た様相を呈し、その内部構造も多くは横穴式石室又は家形石棺等であつて、稀に粘土槨もありこの頃において家形棺や横穴式石室が、少くも広く西日本の諸地方に普及したらしいと考えられる。

さて船島六号点古墳発見のふたつきがその副葬品であるとする、それは肥後の船山古墳や出雲の金崎古墳、葉師山古墳などに近い時期のものであることが考えられ、その頃は未だ後期古墳に特有な横穴式石室や家形棺の普及に至らない時期であり、また古墳に須恵器を副葬することも一般化する程には至つていなかったとすれば、船島古墳群は六号点古墳以外の他の多くのものも箱式棺または殆ど石を用いない埋葬方法をとつていふこと、須恵器を明かに内部に副葬した事実が余り認められぬこと、また山陰本土でこれらと似た箱式棺が所謂後期通例の内部構造や副葬品の一般化する以前に行われた形跡の濃厚なことなどからして、やはり一応六号点古墳と近い時期のものとしてよいと思う。出雲地方の箱式棺については若干の卑見を述べたことがあるが、出雲の葉師山古墳も一種の箱式棺であつたと考

えられ、また伯耆国西伯郡大和村百塚原の一つの箱式棺からは第三図3に示す古式のふたつきを出した⁹⁾ことなどは右のことを傍証しているようである。尚石見国浜田市周布字日脚出土の古式ふたつき(第三図2)も箱式棺様構造の形跡があるようである。隠岐で船島六号墳と類似の構造としては、五箇村苗代田東方丘陵の南古墳や島前西ノ島町黒木神社前の古墳などの例があつて(精査すれば同式のものと同判明するかもしれないと思われるものも他にも若干あるが)、何れも土器を副葬した確かな形跡なく、その行われた時期については船島六号点古墳は参考せらるべきものと思う。

次に五箇中学出土品はその出土状態が不明で推論の限りでないけれども、仮に先に記した斧状石製品が所謂石製模造品で、それと共存した可能性もあるとすれば、或は古墳副葬品かと考えられぬこともない。同じく五箇村重栖運三郎宅出土品も特殊な石を用いた構造物などない所から出土したようであるけれども、例えば美作では粘土柳から此種の遺物を出した例もあることを以て見れば、その環境からしても古墳たる可能性が考えられぬこともない。

次に五箇村川向丘陵の古墳はその主体は既に壊されてい¹⁰⁾て確かな形式は不明であるけれども、掘り上げた石の具合からすれば、一種の箱式棺乃至小形竪穴式石室等の小形空間をもつ構造であつたと思われ、横穴式石室とは思われ¹¹⁾ない。次に西郷小学校のものは環境から推して古墳出土の可能性があるという以上のことは云えない。

以上により古式の須恵器の行われた時期には箱式棺や石

を余り用いない埋葬施設が行われたらしく、横穴式石室や家形棺は、山陰本土では既にそれらが行われ始めた頃に於ても隠岐では尚確かに行われた証拠は見当らぬと云える。

さて次に、ありふれた形式の須恵器はどのような形式の内部構造に伴っているかを簡単にみることにする。古式の須恵器については主にふたつきを見たので、便宜上ここでもふたつきを手がかりとする。第二図4は西郷町大字東郷字小田の消滅した古墳の出土品であるが、その構造は説明を聞くに一種の変態箱式棺乃至変態竪穴式石室とも称すべき、丘麓に近い所の古墳であつたようである。即ち箱式棺としては当地方に通用のものに比し、やや空間の拡大されたものであるが横穴式石室でないことは確かなようである。同図の5は同町飯田小学校裏の白崎古墳の出土品で、これは内部構造の大部分が残存して、その大体の姿は推察出来る。それは右と同様な変態竪穴式石室である。

さて第二図に示すこの二品は、何れも先に記した古式のものに比し製作の簡略化、形の墮落の甚しいものであつて、就中5はその最も極端なものである。出雲方面の古墳出土例からすると、このような品はしばしば同図の6に示すようなふた茶わん形の品と共存し、6形の品のみ出土した例は極めて稀である。また出雲国分寺址の二回の発掘で出土した須恵器を検討すると6形の品は相当多数見られるのに反して、5形の品は一片も見られぬことからして、恐らく奈良中期には既に古くからのふたつきの系統のものは絶えて、6形のもの¹²⁾が専ら行われたかと考えられる。若し

このようなことが隠岐にも大体あてはまるとすれば、そこにこれらの式の器を出した古墳の実年代も凡そ見当をつけ得るであろう。ところで第二図の45を出した古墳は横穴式石室ではなく、また4に近い形の品を出した西郷小学校附近の数基の古墳も之と類似構造のものであることから推すと隠岐では八世紀に近い頃にも横穴式石室でなく右の如き一種の構造がなお多く行われていたことを思わせる。このことは近年隠岐で発見された横穴には6形式の品が多く見られるようであり、現に海士村御波の一の横穴の如き6式のみを出し、一個の5形品を認めない。こうした方面から見ると、出雲地方の横穴に比し隠岐のものは若干年代がずれるのではないかという印象を与える。

但し前記の変態竪穴式石室や横穴は、どの村落にもあるような小規模の墳墓であつて、隠岐最大の古墳と思われる西郷町平神社の前方後円墳(長さ約五〇米)は明かな横穴式石室の遺構をもつが、その墳丘上から発見された大形広口の甕の如きは山陰本土の例から推すと、とうてい第二図の45等の時期に平行するものでなく、五箇村重栖宅出土品より僅かに降る時期のものであつて、横穴式石室が西日本に普及し始めてからそれ程多くの年数を経ぬ頃のものようであり、五箇村水若酢神社の羨道頗る長く、奥室内に二つの割り抜き石棺をもつ横穴式石室も、その出土品たるたかつき(東京国立博物館蔵。脚部のみ現存)を見ると山陰の後期古墳盛時のものとしてよく、第二図の45等よりも恐らく古い時期と思われる。

四、結

以上甚だ小数の断片的資料をとりあげたのであるが、これによつて少くとも隠岐島にも山陰本土と大体同様に初期の須恵器が既に流入しているということは知られると思ふ。初期の須恵器はその特殊な事情からして、文化の中心地帯から供給されたものと見るべく、地方的な形式差が少く、また年代的にも少々僻地だからとてその年代のずれも考えられないのであつて、これらの点から古墳の年代観を組み立てる上にも有益な資料と考えられる。試みに云えば肥後の船山古墳が、その出土品たる太刀の銘文などからして仮に五世紀後半のものとするならば、それと近い須恵器を出した隠岐の古墳もそれに近い年代に該当させることは、それ程不都合とは云えないと思ふ。また山陰本土の須恵器をも考慮に入れれば、隠岐の古墳の終頃のものとしてよい横穴には八世紀に属するものも相当数あるものと考えても大きな誤はないと考へる。これらのことを基礎として隠岐の古墳の年代観について尚更に考察をおし進めることも何程かは許されてもよいように思ふのである。

註①②③ 拙稿「鳥根大学出土薬師山古墳遺物について」(鳥根大学論集第五号)

④ 同前、並に拙稿「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」(鳥根大学論集第六号)

⑤ 小学館刊「図説日本文化史大系第一巻」二七六頁所載

⑥ 尾崎喜左男氏著「古墳のはなし」巻頭写真

⑦ 拙稿「浜田市めぐる古墳遺物について」(鳥根大学論集第七号)

⑧ 日本考古学協会第十二回総会研究発表要旨

⑨ 佐々木謙氏の高教による ⑩ 近藤義郎氏著「蒜山原」本稿は昭和三十二年度文部省科学研究費による研究の一部である